スポーツパフォーマンス研究，2，100-105，2010

男子バスケットボール競技がオリンピックに出場するために望むこと
-トップ選手はヨーロッパ（特にドイツ）のプロリーグを目指そう-

三浦　健，濱田幸二
鹿屋体育大学

キーワード： オリンピック，バスケットボール，バレーボール，ハンドボール，屋内球技集団競技

【要　旨】

近年の屋内球技集団競技における日本は、予選を突破して五輪本戦へ出場することが非常に厳しい状況である。これに対し、北京五輪に多数出場したのは、ヨーロッパ大陸の国々である。バレーボール、ハンドボールの日本代表レベルのプレイヤーの一部は、ヨーロッパのプロリーグに所属して技術力や精神力を磨くことで日本を五輪に導きたいという強い意志を持って活動している。男子バスケットボール競技は、プロリーグ最高峰の NBA を目指すのは正直厳しい。そこで、オリンピック出場レベルのヨーロッパの国々（特にヨーロッパ出場国中最下位のドイツ）のプロリーグへの所属を目標とし、大活躍をして更なる飛躍を目指すというステップを踏むのはどうだろうか。現在の日本代表レベルのトッププレイヤーは、体格、身体能力ともにヨーロッパ諸国に引けを取らない高いレベルだと思う。彼らもこのような認識を持ってヨーロッパ（特にドイツ）のプロリーグを目指し、日々の練習や試合での高いレベルに身を置いて、世界で戦える技術力や精神力を培って欲しい。そうすることにより日本男子バスケットボール界がレベルアップし、アジア予選を突破して五輪に出場できる可能性が開けると考える。

スポーツパフォーマンス研究、2、100-105、2010年、受付日：2010年3月3日、受理日：2010年7月13日
責任著者：三浦健　〒891-2393 鹿児島県鹿屋市白水町 1 鹿屋体育大学 k-miura@nifs-k.ac.jp

－－－－－

Japan’s top basketball players who want to participate in Olympic men's basketball should aim at the European (especially German) professional leagues

Ken Miura, Koji Hamada
National Institute of Fitness and Sports in Kanoya

Key Words: Olympics, basketball, volleyball, handball, indoor team sports

[Abstract]

Recently, Japanese athletes who do indoor team sports have found it difficult to qualify in the preliminary rounds for the Olympics. In contrast, many European countries' indoor sports teams were able to participate in the Beijing Olympics. Some Japanese national-level volleyball and handball players are eager to lead Japan to the Olympics by first improving their technical and mental strength in the European professional leagues. In men's basketball, whereas it is extremely difficult to be accepted in the American NBA, which is the highest professional league, an alternative might be starting in a professional league in an Olympic-level European country, e.g., Germany, which has the lowest rank among European teams in the Beijing Olympics, and then, after that, aiming higher. Top players in the present Japanese national-level teams are thought to have physical abilities and strength equal to European athletes. It is hoped that the Japanese athletes will aim at a European professional league in order to develop world-class technical and mental strength through high level practice and competition. Then, Japanese men’s basketball may win the Asian preliminary round and get a ticket to the Olympics.

Ⅰ．はじめに

北京オリンピックにおいて、日本女子ソフトボールが、球技としては1976年モントリオールオリンピックでのバレーボール女子以来、32年ぶりの金メダルを獲得した快挙は記憶に新しいところである。しかし、2012年のロンドンオリンピックでは、メダル獲得の有力種目であるソフトボール、野球が実施競技からの除外が決まっている。

その一方で、1936年からオリンピック種目として実施され、伝統ある男子バスケットボール競技において、日本は、第1回実施のベルリンオリンピックから出場が可能な8回のうち、6回出場と高い割合で出場していたものの、1976年のモントリオールオリンピックの出場を最後に予選敗退が続き、北京オリンピックでも出場を逃している(表1)。他の屋内競技であるバレーボール、ハンドボールでも近年ではメダル獲得どころか、予選を突破してオリンピック本戦へ出場することも非常に厳しい状況である。

表1　日本の夏季オリンピックでの競技成績（バスケットボール バレーボール ハンドボール）

	開催年	開催地	開催国	バスケットボール男子	バスケットボール女子	バレーボール男子	バレーボール女子	ハンドボール男子	ハンドボール女子
29回	2008	北京	中国	予選敗退	予選敗退	11位T	5位T	予選敗退	予選敗退
28回	2004	アテネ	ギリシャ	予選敗退	10位	予選敗退	5位T	予選敗退	予選敗退
27回	2000	シドニー	オーストラリア	予選敗退	予選敗退	予選敗退	予選敗退	予選敗退	予選敗退
26回	1996	アトランタ	アメリカ	予選敗退	7位	予選敗退	予選敗退	予選敗退	予選敗退
25回	1992	バルセロナ	スペイン	予選敗退	予選敗退	6位	5位	予選敗退	予選敗退
24回	1988	ソウル	韓国	予選敗退	予選敗退	10位	4位	11位	予選敗退
23回	1984	ロサンゼルス	アメリカ	予選敗退	予選敗退	7位	3位	10位	予選敗退
22回	1980	モスクワ	ソ連	日本不参加（バレーボール女子、ハンドボール男子は日本選手団を結成していた）					
21回	1976	モントリオール	カナダ	11位	5位	4位	1位	9位	5位
20回	1972	ミュンヘン	西ドイツ	14位		1位	2位	11位	
19回	1968	メキシコシティ	メキシコ	予選敗退		2位	2位		
18回	1964	東京	日本	10位		3位	1位		
17回	1960	ローマ	イタリア	15位					
16回	1956	メルボルン	オーストラリア	10位					
15回	1952	ヘルシンキ	フィンランド	予選敗退					
14回	1948	ロンドン	イギリス	予選不参加（戦争枢軸国　日本・ドイツ・イタリアは参加が認められなかった）					
13回	1944			ロンドン開催を第2次世界大戦により中止					
12回	1940			東京開催を日中戦争により返上、ヘルシンキ開催を第2次世界大戦により中止					
11回	1936	ベルリン	ドイツ	9位T				協会未発足	
10回	1932	ロサンゼルス	アメリカ						
9回	1928	アムステルダム	オランダ						
8回	1924	パリ	フランス						
7回	1920	アントワープ	ベルギー						
6回	1916			ベルリン開催を第1次世界大戦により中止					
5回	1912	ストックホルム	スウェーデン						
4回	1908	ロンドン	イギリス						
3回	1904	セントルイス	アメリカ						
2回	1900	パリ	フランス						
1回	1896	アテネ	ギリシャ						

※太枠はメダル獲得 枠内空白は当該種目の開催が無し　文献（財団法人日本オリンピック委員会，1994）より筆者が作表

各競技種目ともこのような厳しい状況を打開するために、競技団体が中心となって様々な強化策が講じられている（財団法人日本バスケットボール協会,2010，財団法人日本ハンドボール協会,2009，財団法人日本バレーボール協会,2009）が、日本代表プレイヤー個人でも様々な取組を行っていると考えられる。

そこで本論では、今後男子バスケットボール競技がオリンピックに出場するために必要と思われる方策を、バレーボール、ハンドボール競技の日本代表プレイヤー個人が実施している（していた）取組を紹介しながら、男子バスケットボール競技の日本代表レベルのトッププレイヤーに提言する。

Ⅱ．バレーボール、ハンドボール競技におけるプレイヤーの取組

バレーボールやハンドボールは、全日本レベルの選手がヨーロッパ各国のプロリーグで活動するケースが見られた（表2）。また、北京五輪にヨーロッパ大陸から出場した数は、出場全12カ国の内、男子バレーボール6カ国（50.0％）、女子バレーボール4カ国（33.3％）、男子ハンドボール8カ国（66.7％）、女子ハンドボール7カ国（58.3％）と多数を占めていた。バレーボールは、イタリアのプロリーグ（セリエA）へ世界の優れたプレイヤーが集まっており、各国のオリンピック出場選手も多く在籍している。このため、2009年からイタリア男子プロバレーボールリーグに在籍しているK.Y.選手は、2部（セリエB）から1部（セリエA）への昇格を目指して現在奮闘している。次にハンドボールは、ヨーロッパが盛んであり、ヨーロッパにしかプロリーグがない。また、バレーボールやバスケットボールのように突出したリーグがなく、ヨーロッパ各国のリーグが横並びで強いという特徴がある。その中でM.D.選手は、北京五輪3位の強豪国スペインの男子プロ1部ハンドボールリーグで活躍している。

表2　主な全日本選手のヨーロッパプロリーグでの経歴

種目	氏名	在籍国	在籍年
男子バスケットボール		なし	
女子バスケットボール	K.T.	イタリア	2000～2001
	I.S.	スペイン	2010～
男子バレーボール	K.Y.	イタリア→ギリシャ→フランス→イタリア	2002～2005
	K.Y.	イタリア	2009～
女子バレーボール	O.M.	イタリア	1995
	Y.T.	イタリア	1995
	S.Y.	フランス	2004～2006
	T.M.	イタリア	2005～2007
	A.E.	イタリア	2008～2009
男子ハンドボール	M.D.	スペイン	2009～
女子ハンドボール	T.M.	デンマーク	2000～2001
	K.M.	スペイン	2003～
	H.A.	デンマーク→スペイン	2004～
	K.A.	ドイツ→スペイン	2006～
	T.H.	ドイツ→オランダ	2006～

彼らは、レベルの高いヨーロッパの所属リーグに身を置き、日々の練習や試合での高いレベルでの競い合いをしながら技術力、精神力を磨き、選手として一層レベルアップすることで、日本のバレーボール界、ハンドボール界に貢献し、日本代表選手として日本チームをオリンピックに導きたいと

いう強い意志が見られるのである（月刊バレーボール，2003，2006，2008，2009，スポーツイベントハンドボール，2009）。

しかし、女子ハンドボールは2000年以降という早い時期からコンスタントにヨーロッパのプロリーグへ日本人選手が在籍しているが、オリンピック出場には結びついていない。これは、所属リーグ内での競い合いでまだ十分な活躍ができていないためであると考えられる。今後身体能力の高い日本人トップ選手による挑戦が待たれるところである。

ヨーロッパのプロリーグは、当然ヨーロッパ人（主に白人）の割合が多く、身体能力も黒人ほどは高くない。したがって日本でトップレベルの身体能力を有する日本人選手が、黒人よりは日本人に近い身体能力である白人と対等以上に競い合えるようになった時に、アジア人（主に黄色人）によるアジア予選を勝ち抜き、オリンピック出場権を得るために貢献することができると考える。

Ⅲ．男子バスケットボールへの提言

バスケットボール界では最高峰のリーグはアメリカであり、女子ではWNBA（Women's National Basketball Association）でH.M.選手（1997～1998）と、O.Y.選手（2008）の2名が在籍し、活躍した。一方男子では、T.Y.選手がNBA（National Basketball Association）で2004年に日本人で初めて出場したが、4試合に出場後シーズン途中で契約解除となった。また、国際大会の代表候補に選出された選手が、NBA入りを目指してトライアウトを受験することで日本代表選出を辞退したケースがあった。日本人のこのような事例だけでなく、世界中の優れたバスケットボール選手がNBAでプレイしたいという夢を持っている。それだけにNBA選手になるのは並大抵のことではないのである。彼らは世界各国のプロバスケットボールリーグに所属して活躍をし、スター選手になること、もしくは出身国のナショナルチームの一員としてオリンピックや世界選手権で活躍することでNBAからのオファーを待つ。ヨーロッパにおける男子プロバスケットボールリーグは、レベルが高く、盛んであり（倉石，2005）、オリンピックに出場したプレイヤーも数多く活躍している。

表３　北京五輪男子バスケットボール競技成績とヨーロッパ6カ国のユーロリーグ成績

	国名	大陸名	予選成績	プロリーグ	ユーロリーグ2009-2010
1	アメリカ	アメリカ	アメリカ1位	有	
2	スペイン	ヨーロッパ	世界選手権1位	有	4ﾁｰﾑ　1位 B8 B8 B16
3	アルゼンチン	アメリカ	アメリカ2位	有	
4	リトアニア	ヨーロッパ	ヨーロッパ2位	有	2ﾁｰﾑ　B16 1次ﾘｰｸﾞ敗退
5	ギリシャ	ヨーロッパ	最終予選1位	有	3ﾁｰﾑ　2位 B16 B16
6	クロアチア	ヨーロッパ	最終予選2位	有	1ﾁｰﾑ　B16
7	オーストラリア	オセアニア	オセアニア1位	有	
8	中国	アジア	開催国	有	
9	ロシア	ヨーロッパ	ヨーロッパ1位	有	2ﾁｰﾑ　3位 B8
10	ドイツ	ヨーロッパ	最終予選3位	有	1ﾁｰﾑ　1次リーグ敗退
11	イラン	アジア	アジア1位	有	
12	アンゴラ	アフリカ	アフリカ1位	有	

表3を見ると、2008年北京五輪での男子バスケットボール競技出場12カ国にプロバスケットボールリーグが存在した。ヨーロッパ大陸はスペイン、リトアニア、ギリシャ、クロアチア、ロシア、ドイツの6カ国が北京五輪に出場し、いずれの国もアジア代表のイランよりも上位であった。また、これら6カ国のプロリーグを含む、ヨーロッパ諸国のプロリーグの上位チーム計24チームによる欧州チャンピオンを決定する大会（ユーロリーグ2009-2010）の成績も示した。これらから、北京五輪で上位の国ほど、ユーロリーグでも概ね上位の成績を挙げている傾向があることが分かる。ユーロリーグは、NBAに次ぐメジャーなリーグであり、ヨーロッパの最高峰リーグである。現在の日本代表レベルのトッププレイヤーは、体格、身体能力ともにヨーロッパの諸外国に引けを取らない高いレベルだと思う。彼らが日本のリーグでの大活躍でとどまっているようだと、日本では通用するプレイが、スケールの大きな外国人に対しては抑えられてしまう等の壁に当たってしまうと思われる。ましてや、最高峰のNBAを目指すには、正直ハードルが高すぎて実現する可能性が低いだろう。

まずはオリンピック出場レベルのこれらの国々のプロリーグへの所属を目標とし、そのリーグで大活躍をして更なる飛躍を目指すというステップを踏むのはどうだろうか？特に、北京五輪においてアジア代表のイラン（11位）よりも1つ順位が上だったドイツ（10位）は、ユーロリーグにおいても他国と比較して成績が劣り、彼らが腕を磨くステップとして適当ではないかと考える。ドイツにおけるプロバスケットボールのトップリーグは、Basketball Bundesliga （BBL）であり、1939年に発足され、1966年にプロ化をした伝統のあるリーグである。BBLの所属18チーム（314名）中、ドイツ人選手の割合は、46.5％（146名）であり、外国人選手を多く受け入れている（Basketball Bundesliga, 2010）。彼らがこのような認識を持ってヨーロッパ（特にドイツ）のプロリーグでの日々の練習や試合に身を置いて世界で戦える技術力や精神力を培っていくことで、日本の男子バスケットボール界がレベルアップし、アジア予選を突破してオリンピックに出場できる可能性が開けると考える。そのためには、彼らが所属する団体やチームが期限付き移籍[注1)]を認める等のバックアップや、日本バスケットボール協会の支援や推進、メディアがNBAばかりを取り上げるのではなく、他国のプロバスケットボールリーグを紹介し、情報を提供する等の協力体制が整うことが重要だろう。日本のリーグにとっては、主力選手が海外に流出してしまうことで一時的には多少の損失があるかもしれない。しかし、彼らが海外リーグで経験を積んで活躍し、アジア予選を勝ち抜き、オリンピック代表権を得る快挙を成し遂げる原動力となることで、国内の男子バスケットボール競技への評価も変わるはずである。日本代表チームが強くなることが、長い目で見れば当該競技の活性化に必ず繋がると考える。

＊＊＊＊＊

注 1） 期限付き移籍･･･選手が現在所属しているチームとの契約を保持したまま、期間を定めて他のチームへ移籍する制度。レンタル移籍とも呼ばれる。

Ⅳ．文献

・Basketball Bundesliga（2010）Beko Basketball Bundesliga． http://www.beko-bbl.de/

・月刊バレーボール（2003）加藤陽一「Evolution（進化）」．月刊バレーボール．57(7):6-12.

・月刊バレーボール(2006)高橋みゆき「新しい風を」．月刊バレーボール．60(6):10-11.
・月刊バレーボール(2008)荒木絵里香「Ciao a Tutti !」．月刊バレーボール．62(11):80-81.
・月刊バレーボール (2009) 日本のエースが海外へ挑戦！ 越川優 イタリアリーグへ．月刊バレーボール．63(8):8-9.
・倉石　平 (2005) 男子バスケットボール競技アテネオリンピック報告．スポーツ科学研究．2:29-50.
・スポーツイベントハンドボール(2009)宮崎大輔アルコベンダスへ移籍！．スポーツイベントハンドボール．31(7):10-11.
・財団法人日本バスケットボール協会(2010)平成22年度事業計画．1-41.
・財団法人日本ハンドボール協会(2009)平成21年度事業計画．1-10.
・財団法人日本オリンピック委員会(1994)近代オリンピック 100 年の歩み．ベースボールマガジン社:東京.
・財団法人日本バレーボール協会(2009)財団法人日本バレーボール協会平成21年度事業計画書．1-3.